

檸檬

梶井基次郎

青空文庫

えたいの知れない不吉な塊が私の心を始終おき圧えつけていた。焦し
ようそう躁と言おうか、嫌悪と言おうか——酒を飲んだあとに宿ふつかよ

酔いがあるように、酒を毎日飲んでいると宿酔に相当した時期が

やって来る。それが来たのだ。これはちよつといけなかつた。結

果した肺はいせん尖カタルや神経衰弱がいけないのではない。また背を

焼くような借金などがいけないのではない。いけないのはその不

吉な塊だ。以前私を喜ばせたどんな美しい音楽も、どんな美しい

詩の一節も辛抱がなくなつた。蓄音器を聴かせてもらいにわ

ざわざ出かけて行つても、最初の二三小節で不意に立ち上がつて

しまいたくなる。何か私を居いたたま堪まらずさせるのだ。それで始終

私は街から街を浮浪し続けていた。

何故だかその頃私は見すばらしくて美しいものに強くひきつけられたのを覚えている。風景にしても壊れかかった街だとか、その街にしてもよそよそしい表通りよりもどこか親しみのある、汚い洗濯物が干してあったりがらくたが転がしてあったりむさくるしい部屋が覗いていたりする裏通りが好きであった。雨や風が蝕んでやがて土に帰ってしまった、と言ったような趣きのある街で、土塀が崩れていたり家並が傾きかかっていたり——勢いのいいのは植物だけで、時とするとびっくりさせるような向日葵があたりカンナが咲いていたりする。

時どき私はそんな路を歩きながら、ふと、そこが京都ではなく

て京都から何百里も離れた仙台とか長崎とか——そのような市へ
今自分が来ているのだ——という錯覚を起こそうと努める。私は、
できることなら京都から逃げ出して誰一人知らないような市へ行
つてしまいたかった。第一に安静。がらんとした旅館の一室。清
浄な蒲団^{ふとん}。匂い^{にお}のいい蚊帳^{かや}と糊^{のり}のよくきいた浴衣^{ゆかた}。そこで一月ほ
ど何も思わず横になりたい。希^{ねが}わくはここがいつの間にかその市
になっているのだつたら。——錯覚がようやく成功しはじめると
私はそれからそれへ想像の絵具を塗りつけてゆく。なんのことは
ない、私の錯覚と壊れかかった街との二重写しである。そして私
はその中に現実の私自身を見失うのを楽しんだ。

私はまたあの花火というやつが好きになった。花火そのものは

第二段として、あの安っぽい絵具で赤や紫や黄や青や、さまざまの縞模様しまもようを持った花火の束、中山寺の星下り、花合戦、枯れすすき。それから鼠花火ねずみはなびというのは一つずつ輪になっていて箱に詰めてある。そんなものが変に私の心を唆そそった。

それからまた、びいどろという色硝子ガラスで鯛や花を打ち出してあるおはじきが好きになったし、南京玉なんきんだまが好きになった。またそれを嘗なめてみるのが私にとつてなんともいえない享樂だったのだ。あのびいどろの味ほど幽かすかな涼しい味があるものか。私は幼い時よくそれを口に入れては父母に叱られたものだが、その幼時のあまい記憶が大きくなって落ち魄ぶれた私に蘇よみがえってくる故せいだろうか、まったくあの味には幽かすかな爽さわやかななんとなく詩美と言ったよう

な味覚が漂つて来る。

察しはつくだろうが私にはまるで金がなかつた。とは言えそんなものを見て少しでも心の動きかけた時の私自身を慰めるためには贅ぜいたく沢たくということが必要であつた。二銭や三銭のもの——と言つて贅沢なもの。美しいもの——と言つて無気力な私の触角にむしろ媚こびて来るもの。——そう言つたものが自然私を慰めるのだ。生活がまだ蝕むしばまれていなかつた以前私の好きであつた所は、たとえば丸善であつた。赤や黄のオードロンやオードキニン。洒しとえば丸善であつた。赤や黄のオードロンやオードキニン。洒し落やれた切子細工や典雅なロココ趣味の浮模様を持つた琥珀色や翡ひすい翠いろ色の香水こうすい壺びん。煙管きせる、小刀、石鹼せつけん、煙草たばこ。私はそんなものを見るのに小一時間も費すことがあつた。そして結局一等いい鉛

筆を一本買うくらいの贅沢をするのだった。しかしここももうその頃の私にとつては重く、しい場所に過ぎなかつた。書籍、学生、勘定台、これらはみな借金取りの亡霊のように私には見えるのだつた。

ある朝——その頃私は甲の友達から乙の友達へというふうな友達の下宿を転々として暮らしていたのだが——友達が学校へ出てしまったあとの空虚な空気のなかにぽつねんと一人取り残された。私はまたそこから彷徨い出なければならなかつた。何か私を追いたてる。そして街から街へ、先に言ったような裏通りを歩いたり、駄菓子屋の前で立ち留まつたり、乾物屋の乾蝦や棒鱈や湯葉を眺めたり、とうとう私は二条の方へ寺町を下り、その果

物屋で足を留めた。ここでちよつとその果物屋を紹介したいのだが、その果物屋は私の知っていた範囲で最も好きな店であった。そこは決して立派な店ではなかったのだが、果物屋固有の美しさが最も露骨に感ぜられた。果物はかなり勾配の急な台の上に並べられてあつて、その台というのも古びた黒い漆塗りの板だったように思える。何か華やかな美しい音楽の快速調の流れが、見る人を石に化したというゴルゴンの鬼面——的なものを差しつけられて、あんな色彩やあんなヴオリウムに凝り固まったというふうにも果物は並んでいる。青物もやはり奥へゆけばゆくほど堆高く積まれている。——実際あその人参葉の美しさなどは素晴らしかった。それから水に漬けてある豆だとか慈姑だとか。

またその家の美しいのは夜だった。寺町通はいつたいに賑かにぎやな通りで——と言つて感じは東京や大阪よりはずっと澄んでいるが——飾窓の光がおびただしく街路へ流れ出ている。それがどうしたわけかその店頭の周囲だけが妙に暗いのだ。もともと片方は暗い二条通に接している街角になつていたので、暗いのは当然であつたが、その隣家が寺町通にある家にもかかわらず暗かつたのが瞭然はつきりしない。しかしその家が暗くなかつたら、あんなにも私を誘惑するには至らなかつたと思う。もう一つはその家の打ち出した廂ひさしなのだが、その廂が眼深まぶかに冠つた帽子の廂のように——これは形容というよりも、「おや、あそこの店は帽子の廂をやけに下さげているぞ」と思わせるほどなので、廂の上はこれも真暗なの

だ。そう周囲が真暗なため、店頭に点けられた幾つもの電燈が驟し雨ゆうのように浴びせかける絢爛けんらんは、周囲の何者にも奪われることなく、ほしいままにも美しい眺めが照らし出されているのだ。裸の電燈が細長い螺旋棒らせんぼうをきりきり眼の中へ刺し込んでくる往来に立つて、また近所にある鑑屋かぎやの二階の硝子窓ガラスをすかして眺めたこの果物店の眺めほど、その時どきの私を興がらせたものは寺町の中でも稀まれだった。

その日私はいつになくその店で買物をした。というのはその店には珍しい檸檬れもんが出ていたのだ。檸檬などごくありふれている。がその店というのも見すばらしくはないまでもただあたりまえの八百屋に過ぎなかつたので、それまであまり見かけたことはなか

った。いったい私はあの檸檬が好きだ。レモンエロウの絵具をチユーブから搾り出して固めたようなあの単純な色も、それからあの丈たけの詰まった紡錘形の恰かっこう好も。——結局私はそれを一つだけ買うことにした。それからの私はどこへどう歩いたのだろう。私は長い間街を歩いてきた。始終私の心を圧えつけていた不吉な塊がそれを握った瞬間からいくらか弛ゆるんで来たともみえて、私は街の上で非常に幸福であつた。あんなに執拗しつこかつた憂鬱が、そんなものの一顆いっかで紛らされる——あるいは不審なことが、逆説的なほんとうであつた。それにしても心というやつはなんとという不可思議なやつだろう。

その檸檬の冷たさはたとえようもなくよかつた。その頃私は肺は

いせん
尖を悪くしていつも身体に熱が出た。事実友達の誰だれかれに私の熱を見せびらかすために手の握り合いなどをしてみるのだが、私の掌が誰のよりも熱かった。その熱い故だっただろう、握っている掌から身内に浸み透つてゆくようなその冷たさは快いものだった。

私は何度も何度もその果実を鼻に持つていつては嗅いでみた。その産地だというカリフォルニアが想像に上つて来る。漢文で習つた「売柑者之言」の中に書いてあつた「鼻を撲つ」という言葉が断れぎれに浮かんで来る。そしてふかぶかと胸一杯に匂やかな空気を吸い込めば、ついぞ胸一杯に呼吸したことのなかつた私の身体や顔には温い血のほとぼりが昇つて来てなんだか身内に元

気が目覚めて来たのだった。……

実際あんな単純な冷覚や触覚や嗅覚や視覚が、ずっと昔からこればかり探していたのだと言いたくなつたほど私にしっくりしたなんて私は不思議に思える——それがあの頃のことなんだから。

私はもう往来を軽やかな昂奮に弾んで、一種誇りかな気持さえ感じながら、美的装束をして街を かつぽ 歩た詩人のことなど思い浮かべては歩いていた。汚れた手拭の上へ載せてみたりマントの上へあてがってみたりして色の反映を はか 量つたり、またこんなことを思つたり、

——つまりはこの重さなんだな。——

その重さこそ常 つね づね尋ねあぐんでいたもので、疑いもなくこの

重さはすべての善いものすべての美しいものを重量に換算して来た重さであるとか、思いあがったかいぎやくしん諧謔心からそんな馬鹿げたことを考えてみたり——なにがさて私は幸福だったのだ。

どこをどう歩いたのだろう、私が最後に立ったのは丸善の前だった。平常あんなに避けていた丸善がその時の私にはやすやすと入れるように思えた。

「今日は一つひと入ってみてやろう」そして私はずかずか入って行った。

しかしどうしたことだろう、私の心を充たしていた幸福な感情はだんだん逃げていった。香水の壇にも煙管きせるにも私の心はのしかかってはゆかなかった。憂鬱こが立て罩めて来る、私は歩き廻った

疲労が出て来たのだと思った。私は画本の棚の前へ行ってみた。画集の重たいのを取り出すのさえ常に増して力が要るな！ と思った。しかし私は一冊ずつ抜き出してはみる、そして開けてはみるのだが、克明にはぐってゆく気持はさらに湧いて来ない。しかも呪われたことにはまた次の一冊を引き出して来る。それも同じことだ。それでいて一度バラバラとやってみなくては気が済まないのだ。それ以上は堪^{たま}らなくなつてそこへ置いてしまう。以前の位置へ戻すことさえできない。私は幾度もそれを繰り返した。とうとうおしまいには日頃から大好きだったアングルの橙^{だいだい}色の重い本までなおいつそうの堪^たえがたさのために置いてしまった。——なんとという呪われたことだ。手の筋肉に疲労が残っている。

私は憂鬱になってしまつて、自分が抜いたまま積み重ねた本の群を眺めていた。

以前にはあんなに私をひきつけた画本がどうしたことだろう。一枚一枚に眼を晒し^{さら}終わつて後、さてあまりに尋常な周囲を見廻すときのあの変にすぐわなない気持ちを、私は以前には好んで味わつていたものであつた。……

「あ、そうだそうだ」その時私は袂^{たもと}の中の檸檬^{れもん}を憶い出した。本の色彩をゴチャゴチャに積みあげて、一度この檸檬で試してみた。 「そうだ」

私にまた先ほどの軽やかな昂奮が帰つて来た。私は手当たり次第に積みあげ、また慌^{あわただ}しく潰し、また慌しく築きあげた。新しく

引き抜いてつけ加えたり、取り去ったりした。奇怪な幻想的な城が、そのたびに赤くなったり青くなったりした。

やっとそれはでき上がった。そして軽く跳りあがる心を制しながら、その城壁の頂きに恐る恐る檸檬れもんを据えつけた。そしてそれは上出来だった。

見わたすと、その檸檬の色彩はガチャガチャした色の階調をひっそりと紡錘形の身体の中へ吸収してしまつて、カーンと冴えかえつていた。私は埃ほこりっぽい丸善の中の空気が、その檸檬の周囲だけ変に緊張しているような気がした。私はしばらくそれを眺めていた。

不意に第二のアイディアが起こつた。その奇妙なたくらみはむ

しろ私をぎよつとさせた。

——それをそのままにしておいて私は、なに喰くわぬ顔をして外へ出る。——

私は変にくすぐったい気持がした。「出て行こうかなあ。そうだ出て行こう」そして私はすたすた出て行つた。

変にくすぐったい気持が街の上の私を微笑ほほえませた。丸善の棚へ黄金色に輝く恐ろしい爆弾を仕掛けて来た奇怪な悪漢が私で、もう十分後にはあの丸善が美術の棚を中心として大爆発をするのだつたらどんなにおもしろいだろう。

私はこの想像を熱心に追求した。「そうしたらあの気詰まりな丸善も粉葉こっばみじんだろう」

そして私は活動写真の看板画が奇体な趣きで街を彩いろどっている京極を下って行った。

青空文庫情報

底本：「檸檬・ある心の風景 他二十編」旺文社文庫、旺文社

1972（昭和47）年12月10日初版発行

1974（昭和49）年第4刷発行

初出：「青空 創刊号」青空社

1925（大正14）年1月

※表題は底本では、「檸檬《れもん》」となっています。

※編集部による傍注は省略しました。

入力：j.utiya

校正：野口英司

1998年8月31日公開

2016年7月5日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

檸檬

梶井基次郎

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>